

「そらをとびたかつたペンギン」

川崎市立下河原小学校六年

西山 にしやま

咲 さき

「みんなにあわせようとかんばるとだんだんは、この言葉がとて心に残りませんでした。なぜなら、私もこの言葉にすごく共感できるからです。ペンギンのモモは、トリのようにおしゃべりをしたり空を飛ぶことができません。みんなに合わせ過ぎてしまふことになり、つかれていやになつてしまふことがなくなり、つりました。なので、モモにとても共感して昔の自分を見ているようで、がんばつているところをみると少し悲しくなりました。でも、今では自分の居場所を見つけて、楽しく過ごせるようになります。この本は、一人一人が違つたり苦手なことがあつても、ありのままの自分を受け止め認め合つていくのが大切だということを伝えました。もう一つ心に残つた場面は、最後の「モモはもう、そらをとびたいとはおもわなかつた。」

というシーンです。モモは自分が水の中だとスイスイ泳げるといふことを知り、そのことを打ち明けます。トリは、おしゃべりをした空を飛ぶことができませんが、泳ぐことはできません。しゃべりをしたり空を飛ぶことはできません。そんな中お互いに行けること、できないことを認め合うことができません。見えますが、難しくても大変なことだと思ひます。この場面では心が温まり、みんながみんな個性を尊重できるようになればいいな、と思ひました。

この本を読んで、一人一人の考えや個性を認め合うことが大切だと気付かされました。これからは、一人一人の個性を尊重し大切に生きていきたいです。この本で学んだことを生かして、ありたいままの自分を隠さずにお互い認め合つていきたいです。